

第一章 扇の謎を解く

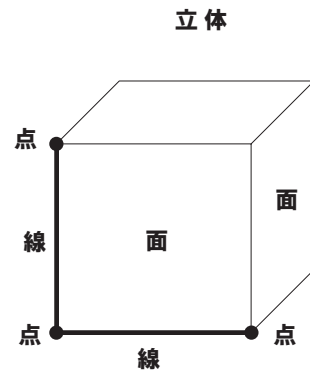
良い〈読み〉とは

「小説や物語は作者の手から離れて独り歩きするので、読者が好きなように〈読む〉でよい」という言い方が、かつてはよく聞かれた。批評や鑑賞ならそれで構わないのだが、研究となるとそうはいかない。書かれた当時の時代性、作者の帰属していた社会の意識など作品の背景を考える必要がある。

そもそも、音読することも〈読む〉、黙読することも〈読む〉、作品の背景を深く理解することも〈読む〉という。「君は〈読み〉が深いね」などというのがそれで、深くも浅くも〈読む〉、作者の発信するメッセージに肉薄する立場であっても読者側から批評・鑑賞する立場であっても〈読む〉と言ってしまう言葉の不自由さがある。

わたくしは、多くの要素がつながって見えてくるのが、「良い〈読み〉」だと考えている。

たとえば、三行目に出てくる語句はどのようでも解釈できそうなのに、一六行目の表現と合わせて考えるとこう考えるしかない、などと。点と点がつながって線になり、線と線がつながって面になり、面と面がつながって立体的に立ち上がってくる——そんな〈読み〉が「良い〈読み〉」だと考えている。本書では、語釈レベルで二説に分かれているものをいくつか紹介しているが、そのどちらの説を採用するかということも、じつは〈読み〉に関わっている。



「那須与一」は、源平合戦の時代、四国の屋島で平家方が差し出した扇の的を源氏方武将の那須与一がみごと射ぬいたという話である。この話について、学校の先生の間でも、「昔の戦争はのんびりしていたのですね」とか「戦場でも遊戯を忘れない優雅さがありました」などと語られることが多いし、これを解説した本では「戦場における一服の清涼剤」「ここぞでちょっとコーヒープレイク」のような章段だと書かれることもある。ところがよく読むと、尻込みして一度は辞退したり、射扇に失敗したら馬上で切腹するとまで誓ったりした与一の追い詰められた心境もみえる。これを、どのように理解すればよいのだろうか。悠長な話なのか切迫感に満ちた物語なのか——それがぶれるほどに「那須与一」はきちんと読まれてこなかったのではないだろうか。

そのことを理解するためには、そもそも扇の的を射ることの意味や、与一が鎬矢を用いなければならなかった理由を解き明かさなければならぬし、この射技がどれほどの困難を伴うものであったかを想定復元してみる必要がある。

第一節 鎬矢とは

那須与一が扇の的を射るのに用いた鎬矢とは、どのような矢なのだろうか。征矢（普通の戦闘用の矢、矢尻の尖った矢）と違って、鎬矢は先端に雁股（雁の足）という矢尻（鏃）と鎬が付いている。このセットを、一般には鎬矢という。雁股、鎬のそれぞれを詳しく見てゆきたい。

1 雁股とは

矢尻にはさまざまなタイプがあり、常識的に考えれば先端の尖ったほうが殺傷能力がありそうである。先細などと呼ばれる矢尻が、その代表である。しかし、そうではない幅広の矢尻がある。楯破、鎧通（尖根）、雁股と称する矢尻群である。多様な形態の矢尻が存在するのは、用途が異なるからである。楯破は楯を破り、鎧通は鎧の札を貫通するための矢尻である。墓目といって矢尻の付いていない矢もあるが、それは犬に射当てるなどして弓射の訓練を行うためであった。このように、人馬を貫通させ殺傷するのか、楯や鎧を破損させるのかなど、弓射の目的によって矢尻が選択された。

与一が射た鎗矢の先端に付いている雁股は、先が二またに分かれていて、内側に刃が付いているので、飛ぶ鳥や走っている獣の足を射切るのに適している。「ひいふつとぞ射切つたる」と表現されているのは、

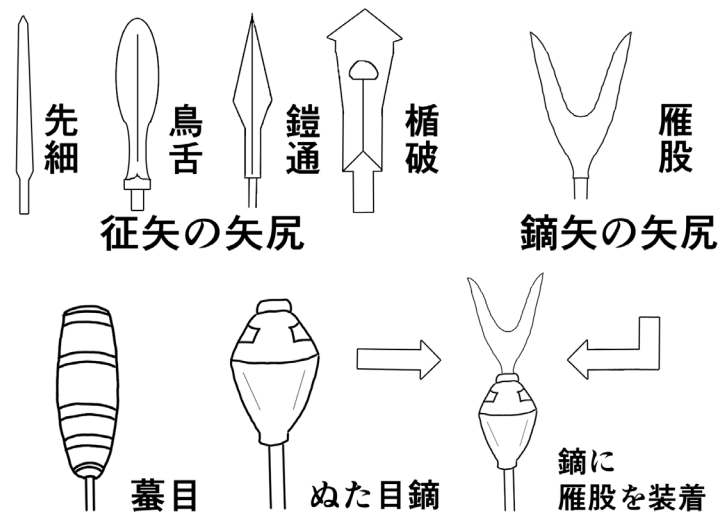


図1 おもな矢尻の種類

矢尻が雁股であることと符合している。人馬を殺傷するための先細のような尖り矢と違って、雁股の殺傷能力は低い。足を止めさせることが優先されるからだ。

2 鎗とは

鎗は、鹿の角をくりぬいて中空にしたものである。のちに朴など木製のものも現れたが、与一の鎗は鹿の角でできていた。そう断言できるのは、「ぬた目」と書かれてあるからだ。これは、鹿の角の波紋状の模様が残るように削り出した鎗のことである。鹿の角の断面は木の年輪に似た同心円状の模様があり（木の年輪ほど細かくはないが）、それを活かしたものであることになる。美しさにもこだわったものだろう。

一般に、鎗には「四目鎗」「八目鎗」などという名称があり、それぞれ鎗の先端に四つないしは八つの穴が開いている。鎗矢が空中を飛ぶと、鎗が笛のように鳴る。鳴らす音によって魔物を退散させるというわけである。『平家物語』巻五「物怪之沙汰」に、音を出す墓目を射て、魔物を退散させようとする話がある。墓目は鎗矢の仲間である（先端に雁股が付いていないかたち）。

「鎗」（テキ）という漢字が存在するように古代中国から鎗矢は使われていた。『史記』（紀元前九一年ごろ原型成立）第一一〇巻「匈奴列伝」に「鳴鎗を作爲す」とあるのが、玉状のカブラを装着した、われわれのいう鎗の初見である。ただし、辞書『説文解字』（西暦一〇〇年ごろ成立）の「鎗」は、音の出ない、たんなる尖り矢の意であった。成立年次は『説文解字』のほうが後だが、おそらく通常の尖り矢のほうが本源的な意味であって（辞書は規範的で前時代的な意